青年の時間的展望と自己意識

五十嵐 敦

（福島大学教育学部）

過去については幼児期から高校期までの出来事が記述され、未来については大学卒業期から老年期に及んだ。

内容のカテゴリーとしては、過去については「友人・学校生活」に関するものが多いく、未来については「職業・地位」については最多で、次いで生活全般的についての記述が多い。

Q1、Q2において過去・未来ともにnegativeな内容を記述した者はなかった。過去のみをnegativeに記述した者は8名、内5名は他の項目においても過去の強い否定やこだわりがみられた。残り3名は現在への消極的態度と未来への期待の低さが特徴的であった。これに対して、未来をnegativeに記述した者は2名で現在を否定的にとらえ近未来の不安を強く示している。

（2）過去・未来への態度と内容
過去をpositive、negativeにとらえた出来事の内容は、いずれの場合も「友人・学校生活」に関することが多い。ただし、negativeな出来事はより具体的に述べ、「自分の性格や人間性」に関しての出来事を述べる傾向があった（X²=30.53, df=7, p<0.01）。

未来についての記述では、positiveなものとしては「結婚・家庭生活」や「自分の生き方」についてが多いく、negativeなものは「職業生活」と「自分の生き方」についてが多かった（X²=61.61, df=6, p<0.01）。

以上の点から、過去の展望についてはその生活体験のほとんどが「学校生活」と「身近な友人関係」によつてなされていることがわかる。また、将来の展望においては「自分の生き方」がpositive、negativeの二面性を持ってとらえられていることが注目される。

（3）現在の生活及び評価と時間的向性
表1のような結果から、現在の生活を積極的・肯定的にとらえている者は未来志向的であり、妥協的な者は現在志向的であると言える。そして、現在を否定的にとらえている、他の制限を否定的に現在志向的傾向があった（X²=39.62, df=4, p<0.05）。

現在を否定的にとらえている者は、現在に満足できないという点で、むしろ現在の生活に基づく積極的にかかわっているようである。しかし、妥協的な者は現在とのかかわりにおいて消極的で、同じ現在志向的であってもそのかかわり方には大きな違いがある。
現在を肯定的にとらえ、未来志向的な者はその記述においても明確な将来意向性を示している。また、現在志向的な者は現在への積極的な関わりを多く述べている。

(4) 自己像の時制による比較

表-2 のように、過去の自己像を否定的に、未来の自己像を期待的にとらえているパターンが最も多い（X²=65.69, df=9, p<.01）。

こうした自己像の時制による比較と現在との関わり方について表したのが表-3 である。現在の生活意識と、現在の自己像と比較した過去の自己像との間には有意な関係がみられた（X²=21.93, df=5, p<.01）。しかし、未来の自己像については期待しているものがかなり多く、現在の生活意識との間には有意な関係性はなかった。このことから、青年の自己意識においては過去の持つ意味が大きく、現在との関わり方やその状況が過去の自己像を否定的にとらえているかが重要であると考えられる。青年期は一般に未来の自己像を重要であると言われることが多いが、現実の生活においては過去の自己像に対する判断が大きな影響を持っているようである。また、記述内容から未来志向的な者の中に安易な逃避的傾向もみられた。そして、過去・未来のいずれの自己像を否定的にとらえている者は、全員が現在を肯定的にとらえている。

(5) 特徴的事例

A. 死が人生最恵の時：中学時代に受けた打撲を中心に、過去についてnegativeな感情を抱いている。現在には満足しており、未来への不安はないとしている。

B. 生きがい探し：過去の自己像を否定的にとらえ、現在の自分の生活についても消極的に考えている。ただし、「生きがいが見つかった」ということで未来の自己像は期待的にとらえている。未来への不安は大きいか。

C. 人間関係の重視：過去・現在・未来とも肯定的な姿勢でとらえ、negativeな記述は人間関係の失敗とその予測である。これからの最良のものとも不安人も人間関係（友人など）を述べている。

A. では、過去の複雑な現象としての未来が見られ、内容には人間関係的な記述が含まれていない。B. では、「生きがい」があれば仮定で、それに対する積極的な記述はなく受動的意識が強い。この傾向は存在するが、しかし、本調査における記述は多様を示した。C. が友人、あるいは家族・職場での人間関係についての記述を多く、過去においてはpositiveに、未来においてはnegative的にとらえる傾向が著しくかった。ただし、自分自身については述べていないのが特徴である。

以上、今回の調査から青年期の時間的展望の大きさ、人間関係を中心にした生活体験によってなされていることが確認できた。特に、人間関係に対する受動的な姿勢が明らかに問われる傾向がありそうである。

また、未来的展望は青年期の重要な課題であるが、そのほとんどが職業の選択や家族の形成という点においても具体的にとらえられている。このことから、青年期の時間的展望はその単なる拡大ということよりも、より実生活的、具体的な制約を受けていることを示している。

最後に、個々の時間的展望の特徴をとらえるうえで、文章完成法による今回のアプローチが有効であると思われる。今後、より有効な青年期理解の手段としての時間的展望からのアプローチについて、その分析方法などを検討していきたい。